

東西文明の比較(30)

▼「古事記」と「日本書紀」について▲

陽光新聞社・顧問 塩澤宏宣

日本最古の書物と言われている「古事記」と「日本書紀」、これを「記紀」と呼んでいることはご存じでしょう。この「記紀」は、中国の「史記」をはじめとする王朝史、旧約聖書、ギリシャ神話に並ぶ世界に誇るべき歴史書であると言われています。

今回は、その極く一端に触れてみたいと思います。なお、「記紀」の解釈については、諸説ありますが、断定的に述べることをお許し願いたいと思います。

🏰 その編纂の背景

当時、東アジアを巡る情勢は極度に緊張していました。

663年、唐・新羅による攻撃で百済が滅び、これに対して倭国が百済の遺臣たちを助けて百済再興の軍を起こします。しかし、この戦い(白村江の戦い：663年)は失敗に終わります。668年には唐の三次にわたる遠征により高句麗が滅び、そして、唐と新羅の間で戦いが始まります。このため唐と新羅は、倭国を自陣営に引き込もうと、それぞれから使者が来ます。天智朝、天武朝のころです。

倭国は、こうした異国との外交・軍事情勢を背景に、自国でも大陸の王朝に習い国史を編纂して、他国に侮られないようにしなければという気運が高まりました。また、虚実がまじりバラバラになっている帝起・旧辞などの史料を早くまとめておかねば、という気風が起きていました。

🏰 天皇家支配を正当化しようとした「古事記」

「古事記」の編纂を指示したのは天武天皇(在位：672～686年)です。天武天皇は、「帝紀」という皇室系図と、「旧辞」と呼ぶ神話や伝承に誤りが多いので、稗田阿礼にこれらの両書を精選させ、全てを暗誦させました。その後、阿礼が年老いて口承が絶えてしまうのを心配した元明天皇(707～715年)が、太安万侶に命じて阿礼の語りを筆録

させたと伝えられています。これが「古事記」です。同書は、上・中・下の三巻で構成され、建国神話にはじまり推古天皇(592～628年)の時代までが載録されています。

🏰 外国の目を意識した「日本書紀」

「日本書紀」も天武天皇の命によって編纂されました。完成は、古事記に遅れること8年後です。「帝紀」と「旧辞」を原本としながらも、中国・朝鮮の正史や日本の古記録を取り入れ、巻数も三十巻、系図一巻という膨大なものとして、元正天皇(在位715～724年)の時代に完成しました。神話から持統天皇までが詳しく収録されています。中心編者は舎人親王(天武天皇の皇子、淳仁天皇の父：676～735年・享年60歳)と藤原不比等(天智天皇から藤原の姓を賜った鎌足の子：659～720年・享年61歳)です。

純粋な「漢文」で書かれていることから、唐や新羅の人の目に触れることを意識した可能性が高いでしょう。

🏰 「古事記」と「日本書紀」のちがいは何処にあるのか

「古事記」のほうが物語性が強く、読み物としては面白いが、「日本書紀」の内容とそれほど大差はありません。両書の前半部分は、神々が活躍する日本神話が詳しく述べられています。

ではなぜ、同時期に似たような歴史書が二つも作られたのでしょうか。

それは、編纂目的が異なるからです。

「日本書紀」は、古代中国がやってきたように、「正史」として編まれた公式記録であり、これ以降も「続日本紀」、「日本後紀」というように、「日本書紀」に続いて五つの正史の編纂が続けられ、全体で「六国史」となります。これに対して「古事記」は、天皇家に保存される私的な蔵書という性格を持ち、単発で終わっています。

ちなみに、両書で述べられている「日本神話」は、東南アジアの神話を骨格としながら、中国・朝鮮、南太平洋、さらにはギリシャ神話の影響まで見られるといわれています。両書では、そんな神話が無理なく天皇家に繋がるように、巧く編纂されてい

ます。つまり、これによって、天皇家は神聖性を帯び、国民支配の正当性が主張できたのです。さらには、天武天皇や藤原不比等など、編纂に関わった実力者に都合の良い改変がなされており、史書編纂の狙いは、まさに己の権力を正当化することにあったといえるのではないのでしょうか。

「推古天皇紀」は空白が目立つ

推古天皇は在位36年で亡くなりますが、治世の前半、聖徳太子が活躍した頃の記述が、極端に少ないのです。推古天皇の信任を受け、蘇我一族と協力して仏教の伝播を成功させた聖徳太子の功績を”無視”することは、蘇我氏と争っている藤原一族(主編者の藤原不比等)としては当然のことでしょう。その少ない中から記述された幾つかの事例を拾ってみましょう。

- 推古元年(593年)、法興寺の心礎(塔の心中の礎石)に仏舎利を納めたこと、厩戸皇子を皇太子に冊立し、摂政に任じたこと。用明天皇(在位：585～587年)を埋葬したこと。四天王寺を建てたことが記載されるのみです。
- 推古二年の項では、皇太子と蘇我馬子に仏教を興隆させたこと。諸臣等も競って親の恩のために寺を建立したこと。(馬子：敏達朝で大臣に就き、用明・崇峻・推古の4天皇に仕え、54年にわたり権勢を振るい、蘇我氏の全盛時代を築いた)
- 推古三年は、淡路島に香木が流れ着いたこと。高句麗の僧惠慈が帰化し、皇太子が師事したこと。百済の僧慧聡が来日したこと。
- 推古四年には、11月に法興寺を造り終わり、蘇我大臣の子善徳を寺司に命じた。惠慈と慧聡を法興寺に住ませた。これだけで1年の記事が終わります。
- 推古五年も寂しい記事です。4月に百済王は、王子阿佐を遣わし、朝貢した。11月に難波吉士磐金を新羅に遣わした。
- 推古六年4月、難波吉士磐金が新羅から帰り、鶺鴒二羽を献上した。これを難波杜で飼わせた。そうしたら、枝に巣を作り子を産んだ。8月には新羅が孔雀を一羽献上した。10月越国が白

鹿を1頭献上した……。これだけです。

日本列島の天災

日本初の地震の記録は「巻十三允恭天皇(在位：412～453年)の5年7月に短く「地震る」とあります。この年が西暦何年かは判りませんが。その後、6世紀末から天災記録が続きます。

- 推古七年(599年)4月27日、地震があり、家屋が壊滅した。そこで四方に命じて地震の神を祀らせた。
- 天武四年(675年)、11月「この月、大きな地震があった」とあります。
- 天武六年5月、「日照りが続き雨乞いをした」とあり、6月14日には「大きな地震があった」と述べられています。
- 天武七年12月の条には、九州筑紫国で大地震が起きた。幅二丈(一丈は約3メートル)、長さ3000余丈にわたって地面が裂け、百姓の家は村ごと倒壊したと、あります。このとき五馬山(大分県日田市)の一部が崩壊して温泉が出ました。
- 天武八年、九年、十年、十一年と立て続けに「地震る」と記述があります。
- 天武十三年(684年)10月14日には甚大な被害をもたらした巨大地震が起きました。人々が寝静まったころです。山は崩れ、川は溢れた。諸国役所の倉庫、寺塔、神社のたぐいも倒壊、その数計り知れず。人や家畜の多くが死んだ。田畑五十四万頃(しろ：約1200ヘクタール)が埋もれて海になった(地盤沈下)。大音響がした。伊豆島(大島)の西と北の二つの面が、自然に300余丈隆起して、新たな島になった。土佐では、大潮がたかく上がり、海水が満ちあふれ、寄せてきた。調を運ぶ船の多くが転覆して無くなった。これがいわゆる「白鳳大地震」で、南海トラフ巨大地震のことです。東海地方の地震を誘発したことも記されています。

今から1334年前の大地震、この再来があってもおかしくないといわれています。

皆さん！気をつけましょう。